

■ 寄稿

## 根津永二先生のこと

岡田義昭

目次

- 1 オイコノミカ
- 2 師の評価
- 3 御著書
- 4 愛知学院大学時代
- 5 研究深化の指針
- 6 結びにかえて

## 1 オイコノミカ

私が根津先生のお名前を初めて存じ上げたのは、今からおよそ30年前のことである。1975年3月に私は博士課程を単位取得満期退学となった。その後も引き続いて博士論文作成のため、指導教授の研究指導を受けていた。恩師の指導は厳しく、専門分野の学術著書に加え、最先端の研究成果が披瀝される幾つかの内外論文誌にも常に目を通しておくことが命じられた。RES, JPE, QJE, Econometrica, AER, EJ, 季刊理論経済学などがそれであった。加えて名古屋市立大学経済学部の紀要である「オイコノミカ」もまた必読誌であった。1970年代後半のオイコノミカには、柴田裕教授の国際金融論、妙見孟教授の統計理論・数理経済学、岩橋亮輔教授の制御理論、木村吉男教授の経済成長論、さらには根津永二助教授の貨幣論などに関する論文がそれぞれ綺羅星のごとく毎号を飾っていた。これら論文を他の学術論文誌同様、舐めるように読んではレジュメを作り、咀嚼することに努めた。とりわけ根津先生の貨幣論は、従来の観念的・思弁的な貨幣論とは異なり、われわれが通常慣れ親しんだミクロ・マクロ経済理論の延長上で操作可能的に展開されていることから、一定の努力を払えばその論理構造やインプリケーションを掴むことは決して困難な作業ではなかった。貨幣経済の諸問題に対する深い洞察力、透徹した直観、緻密な論理展開がそれら諸論文には満ち溢れており、多くの示唆を得たのであった。これが当時“助教授”であった若き根津先生のお名前を初めて存じ上げるきっかけであった。

## 2 師の評価

その後1980年から82年にかけて、国際金融の研究を深めるべく私は英国ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (LSE) 大学院に留学した。LSE での研究指導教授は Buiter 教授と故森嶋通夫先生であった。ときたま週末に森嶋先生のご自宅に呼ばれ、奥様の手料理を頂くことがあった。その席上、なにかのひょうしで根津先生の話が出た。あとで分かったことであるが、実は根津先生は大阪大学の大学院時代に森嶋先生から一般均衡理論分野の研究指導を受けていたというのであった。森嶋先生曰く、「根津君は、言うたら頑固でんな。自分がこうと思うたらもうあきまへんわ。なんちゅーか、あらゆる困難を克服してやり遂げはるだけの強さちゅーものがあるんねん。彼がペンシルベニア大学へ留学したいと来なはったときも、わしは学位がとれんかったらみっともないからやめときと答えたの。そやけど、聞き入れずとうとう行ってしもうたわ。ハハハ。まあ、最後は Ph.D をあんじょうもろうてきたから、ひとまず格好ついたんで安心しましてん。」これが恩師の愛弟子に対する“成績表”であった。言葉の端々に教え子の学才を高く買っておられる様子が窺い知れるのであった。

## 3 御著書

1984年8月に根津先生は成文堂から1冊の御著書を上梓された。『貨幣の需要と中立性』とい

う題名で、ペン大留学後それまで10年以上にわたり取り組まれた貨幣論の御研究を纏め上げたものであった。貨幣の中立性に関しては一般に二通りの定義がある。すなわち、貨幣の存在しない実物経済の均衡と貨幣の存在する経済の均衡とを比較する場合の中立性と、さらには貨幣経済で貨幣量や貨幣供給が変動したとき、経済にどのような影響を及ぼすかというようないわば比較静学上の意味での中立性である。同書では、そうした両義的な貨幣の中立性概念を中心に据え、貨幣や債券の役割、需要構造、および経済的効果に対して最先端の分析ツールを駆使することで斬新かつ有意味な結論を導いている。当然のことながら同書は学界で洛陽の紙価を高めたとの評価を得たのであった。私にとっても学ぶところ極めて大であった。当時私はマンデル＝フレミング＝ドーンブッシュ流の“新興”国際マクロ経済学とともに、伝統的な理論体系である一般均衡理論の枠組みの下で国際通貨金融の諸問題を考えていた。ところで、アロー＝ハーンやデブラー・タイプの一般均衡理論では、貨幣はあくまで価値尺度財としてのみ取り扱われており、したがって貨幣といえども他の  $n$  個の財と同等の単なる“ $n + 1$  番目の財”程度でしかない。さらにまた、将来時点の資源配分に至っては先物市場の完備性を想定することで巧妙に処理されていて貨幣の出番はない。それゆえ、価値尺度以外の他の貨幣に関する重要な機能、すなわち交換手段や価値保蔵手段などに関しては同体系からはうまく説明できないのであった。そこで、それら不備を繕うべく、交換手段としての貨幣を明示的に取り扱った①非市場交換・2人間取引モデル（オストロイ、スター）、②数量調整モデルないしは非ワルラス的均衡モデル（ベナシー、ドレーズ、マランボー、根岸）、③再決定 (dual decision) 仮説モデル（パティンキン、クラウワー、レイヨンフーパー、バロー、グロスマン）等の系列、ならびに将来価格の予想像を組み込むことで価値保蔵手段としての貨幣を扱った④一時的均衡 (temporary equilibrium) モデルないしは継起的経済 (sequential economy) モデル（グラモン、ユネ、グリーン、ソンダーマン、デルバーエン、福岡）などに取り組んでいた。加えて、傍らでは、その後の学界・政策担当者に大きな衝撃を与え、国際金融論分野においても他の分野同様パラダイム転換をもたらした所謂“ルーカス批判 (Lucas critique)”が既に胎動していた。そんなおり手にしたのが、『貨幣の需要と中立性』であった。主要部分をまとめた抜書きを今日読み返すと、先生の胸を借りて重要テーマと格闘した跡が偲ばれ、しばし甘酸っぱい思いにとらわれるのである。

#### 4 愛知学院大学時代

根津先生とはその後も学会などでお目に掛かかり、警咳に接した。しかしながら、いずれにせよ正直なところ麓から遠く高い頂を仰ぎ見る感じ以上のものではなかった。ところが、こうしたことが2002年を境に大きく変わる。前年に愛知学院大学商学部は、国際金融論担当の教員を公募した。種々事情があって当時勤務していた大学から新天地に移りたい希望を持っていたので、早速応募し、幸いにも採用された。実はそのときの業績審査委員長が既に名古屋市立大

学から移られていた根津先生であったのだ。面接では、あの“大”先生から試問されるということで緊張し、そこでどういうやり取りとがあつたかは今はまったく記憶にない。副査を務められた他の二人の先生との試問内容は鮮明に覚えているというのに…。それから先生が退職されるまでの6年間、様々な薫陶を直接授かった。個人的な研究上のことはもちろんのこと、産業研究所での共同研究プロジェクト、院生の博士学位論文審査、商学研究科のカリキュラム編成、教員採用昇格人事などをご一緒し、実に充実した日々であった。また、仕事の合間に、令名をはせた先生方のゴシップ談を拝聴するのも楽しみ一つであった。ただしその間、先生から学内行政の愚痴はしばし聞かされたことがあっても、先生ご自身の研究に関する弱音や苦労話はただの一度たりともお聞きしたことはない。学部・研究所の紀要には退職直前まで率先して示唆に富む論文を寄稿された。学問に精進し、真理の探究に勤しみ、己に厳しく、甘えや妥協を一切許さない信念の学徒の姿そのものである。至らない私には大いに学びたい思いで一杯である。

## 5 研究深化の指針

ところで、私の学位申請論文『外国為替相場制度と国際金融システムの安定性に関する研究』に対して審査委員長の労をお取り願ったのもこれまた根津先生であった。同論文は、経済のグローバル化が進展する今日、国際通貨金融システムの不安定性を最小化し、先進国・新興国間で連携・協調した経済活動を保証するような外国為替相場制度とはいったいどのようなものであろうかという点を、国際マクロ経済学の分野にてそれまで彫琢されてきた豊穡な理論体系を援用して論じたものであった。2003年2月に学位授与式が学長室で執り行われた。席上、先生から過分の御祝辞を頂いた。そのなかで、「学位論文で残された課題を踏まえ、今後の研究方向として、東アジアの国際通貨金融制度構築に関する研究の深化を期待したい」とのお言葉があった。心中にストンと入ってきた。それは大袈裟に言えばまさに「天の啓示」に似たものであった。それから3年半、研究に励み、2006年12月にとりあえずの中間報告として『国際金融の新たな枠組み』を上梓した。万感の思いを込めて「はしがき」に根津先生への謝辞を表した。なお先生自身の拙著に対する評価は日本金融学会誌 (Vol.25, 2007) の「書評」欄に掲載されている。新たなチャレンジを再度頂いた。

## 6 結びにかえて

根津先生の師でもあり、また私のLSEでの師でもあった故森嶋先生は、2年間の留学を終え帰国の挨拶に伺った研究室で、「僕の研究指導に対する君の感謝の気持ちは、僕にではなく君の後に続く者に伝えなさい」と話された。根津先生が愛知学院大学商学部を退職された今日、先生から四半世紀以上に亘りこれまで授かった計り知れないほどの学恩の幾分かなりとも後進に返し得たらと日々願っている。

(2008.7.2)